

(2) 汀線の変動

- * 現状の汀線形状および背後地の利用（漁民倉庫等）状況から考えて、現状の汀線は平衡状態で安定しており、継続的な侵食や堆積は生じていないものと考えられる。
- * サイト西端の小入江が長年にわたって施網船に利用されて居る事実は、サイトの西端には継続的な土砂堆積が生じていないことを意味する。
- * 新漁港はサイト西端に計画するもので、漁港の建設によって、漁港東側に土砂の堆積が生じ、汀線が海側に前進するとは考えられない。（現状のサイト西端と漁港建設後の漁港東側とを比べれば、東寄りの波では、波当たりには差異は無く、北寄りのなみについては漁港建設後の漁港東側の方が波当たりは強くなる。）
- * 従って漁港の東側の汀線が前進し、その影響が港口にまで及ぶ可能性はない。

8.2.1.2 通常時波浪時の海浜流および水深変化の特性（参照図：図 8.2.1-2～8.2.1-5）

- * 北寄りの波および東寄りの波に対する海浜流と水深変化計算の一例を図に示す。（計算条件は凡例の通り）
- * いずれの計算でも、現状では、等深線が海側に凸な個所で岸に向かう流れが発生し、凹な個所で流れが冲向きになっている。浜の前面では北寄りの波の場合、総体的に流れは東に向かい、東寄りの波の場合には、西に向かう。ただし、計画サイト西側の岩礁が張り出している部分（この部分の海底は岩質で、砂分は存在しない）では、いずれの方向の波に対しても計画漁港の港口、すなわち東、岸側に向かう流れが生じている。
- * 漁港計画後は、防波堤の東側および港口付近で、両方向の波に対して海浜流が弱まっている。計画サイトの西側の岩礁が張り出している部分から、港口方向に向かう流れは、弱められるものの依然として残っているが、この流れが発生する領域の海底は岩質であり、漂砂があったとしても、極めて少ない。
- * この結果、いずれの波向きに対しても港口付近が、急激に埋没する傾向は見られない。
- * しかし、浮遊砂の拡散等によって、砂が港口および港内に侵入することまでを防ぐことは不可能で、長年月の間には少しずつ港内が浅くなることは避け得ない。
- * 港口水深が 3.5m、港内水深が 2.0m の計画は、零細漁船は勿論、施網船に対しても、十分な余裕のある水深であり、また、斜路の沖側先端は、1.5m とし、港内の海底から 0.5m 高くなっている。
- * 従って、本計画は埋没に対して、十分余裕のあるものとする。

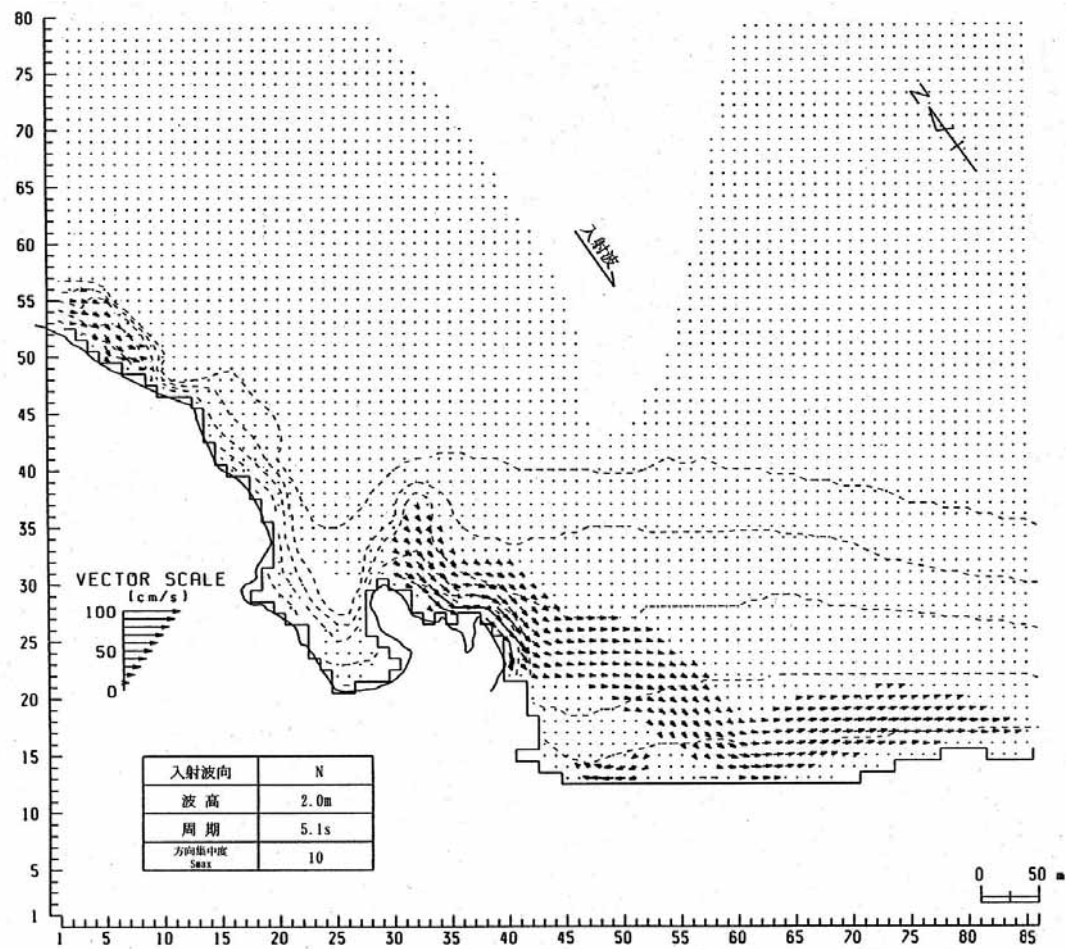


図 8.1.2-2(1) 海浜流の計算結果 (現況地形、波向：N)

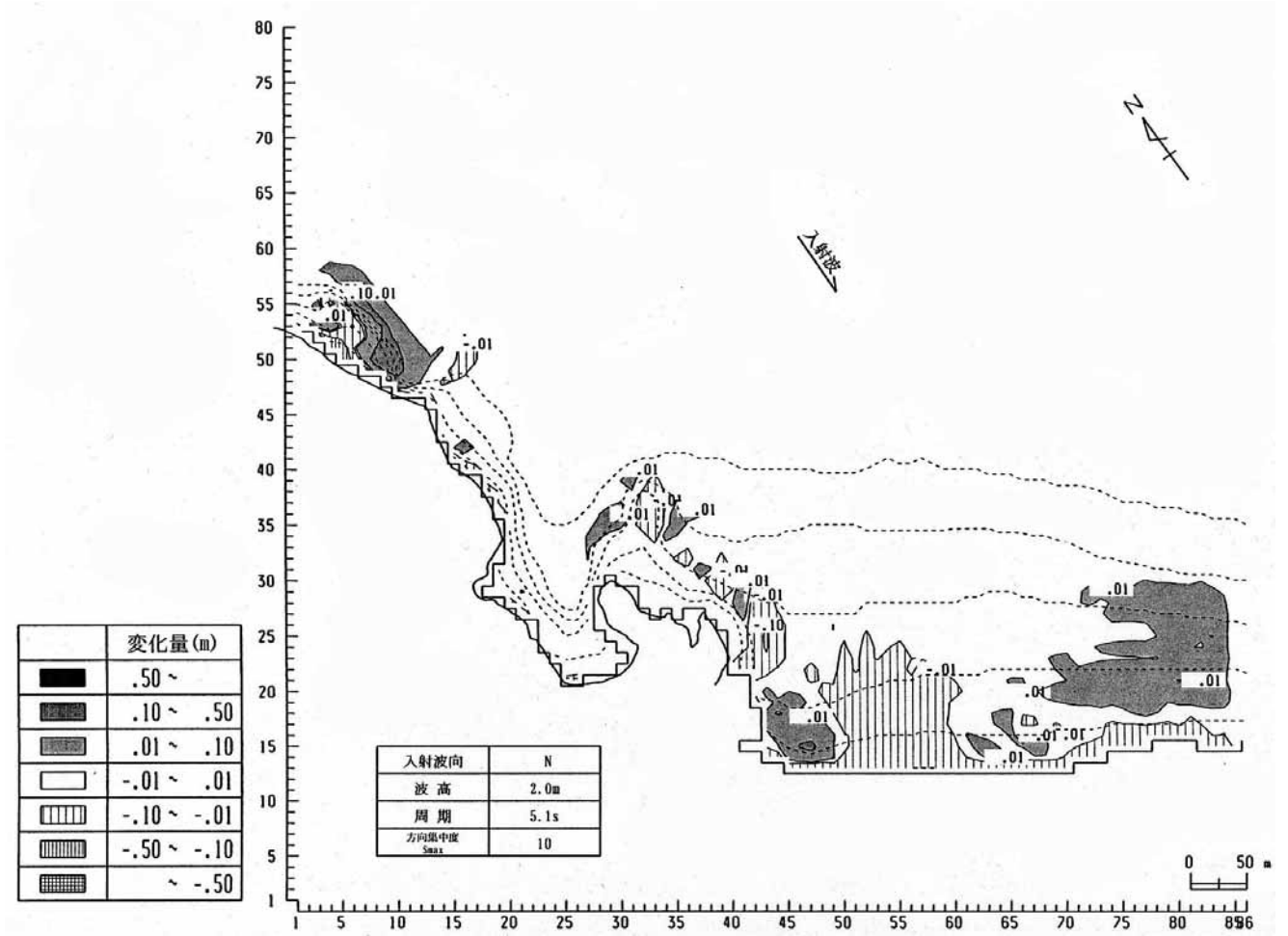


図 8.1.2-2(2) 地形変化予測計算結果 (現況地形、波向：N)

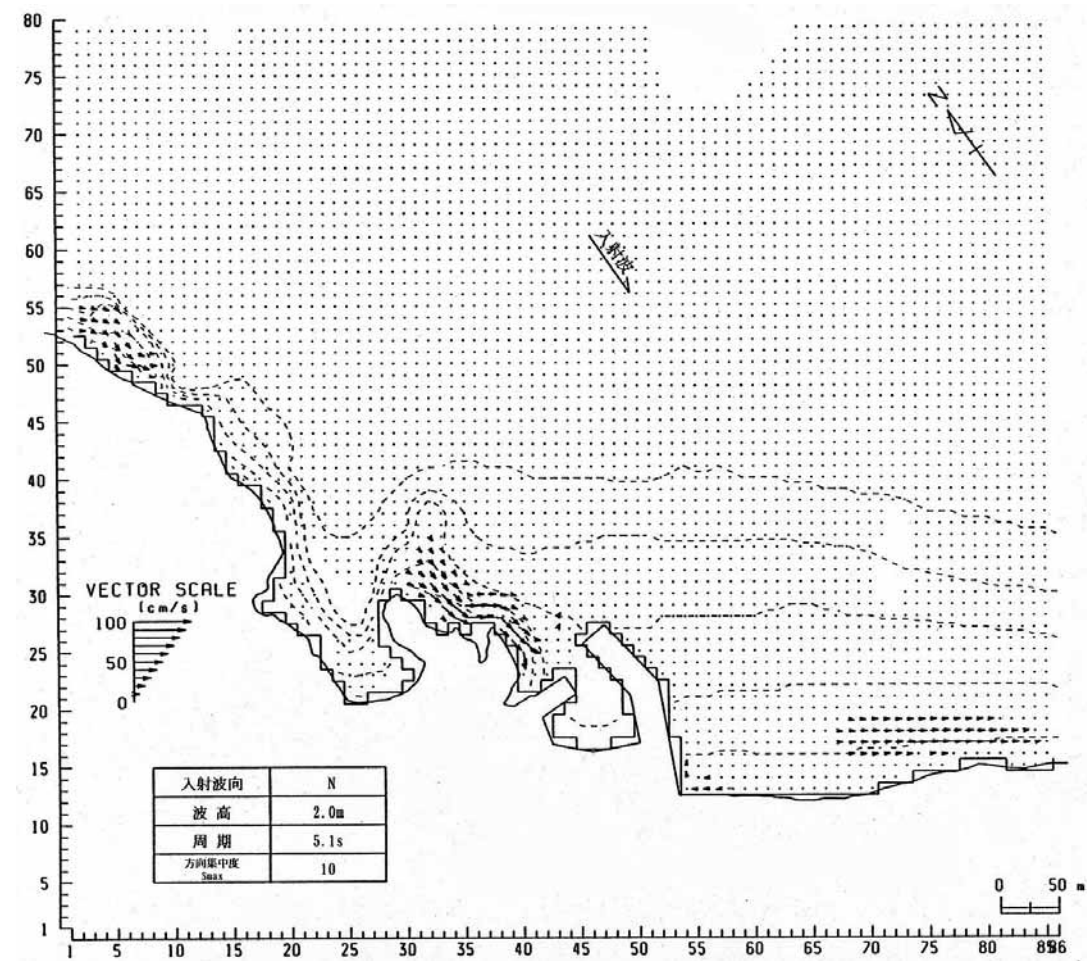


図 8.1.2-3(1) 海浜流の計算結果 (漁港建設後、波向：N)

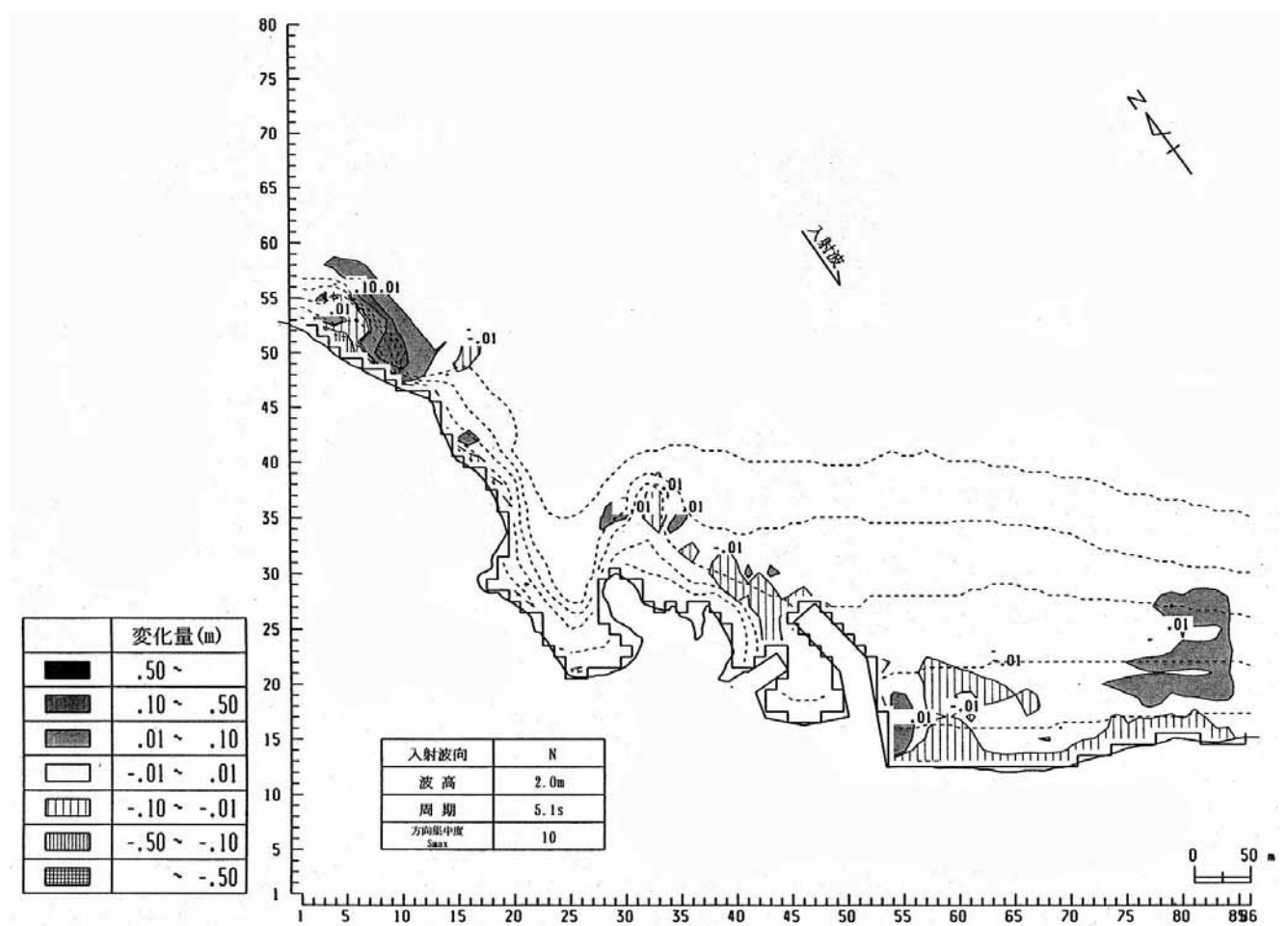


図 8.1.2-3(2) 地形変化予測計算結果 (漁港建設後、波向：N)

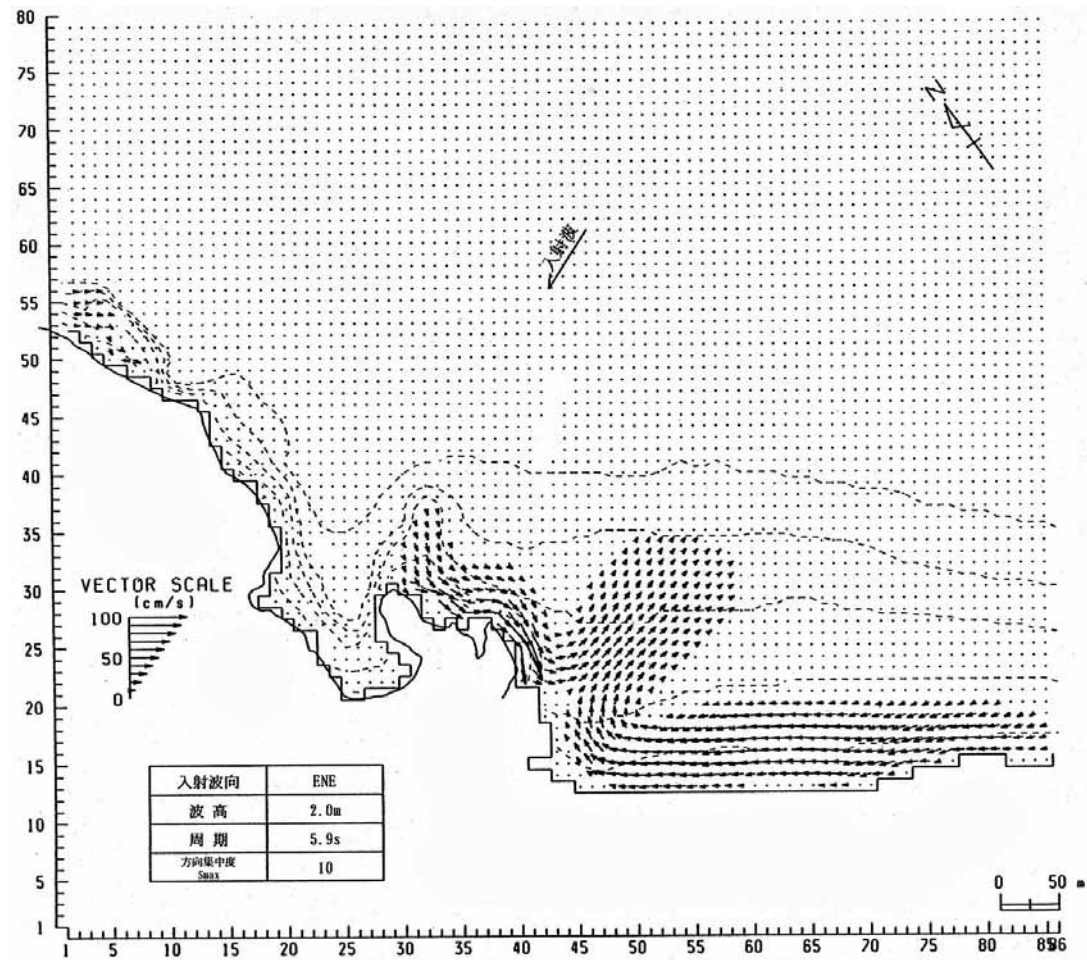


図 8.1.2-4(1) 海浜流の計算結果 (現況地形、波向: ENE)

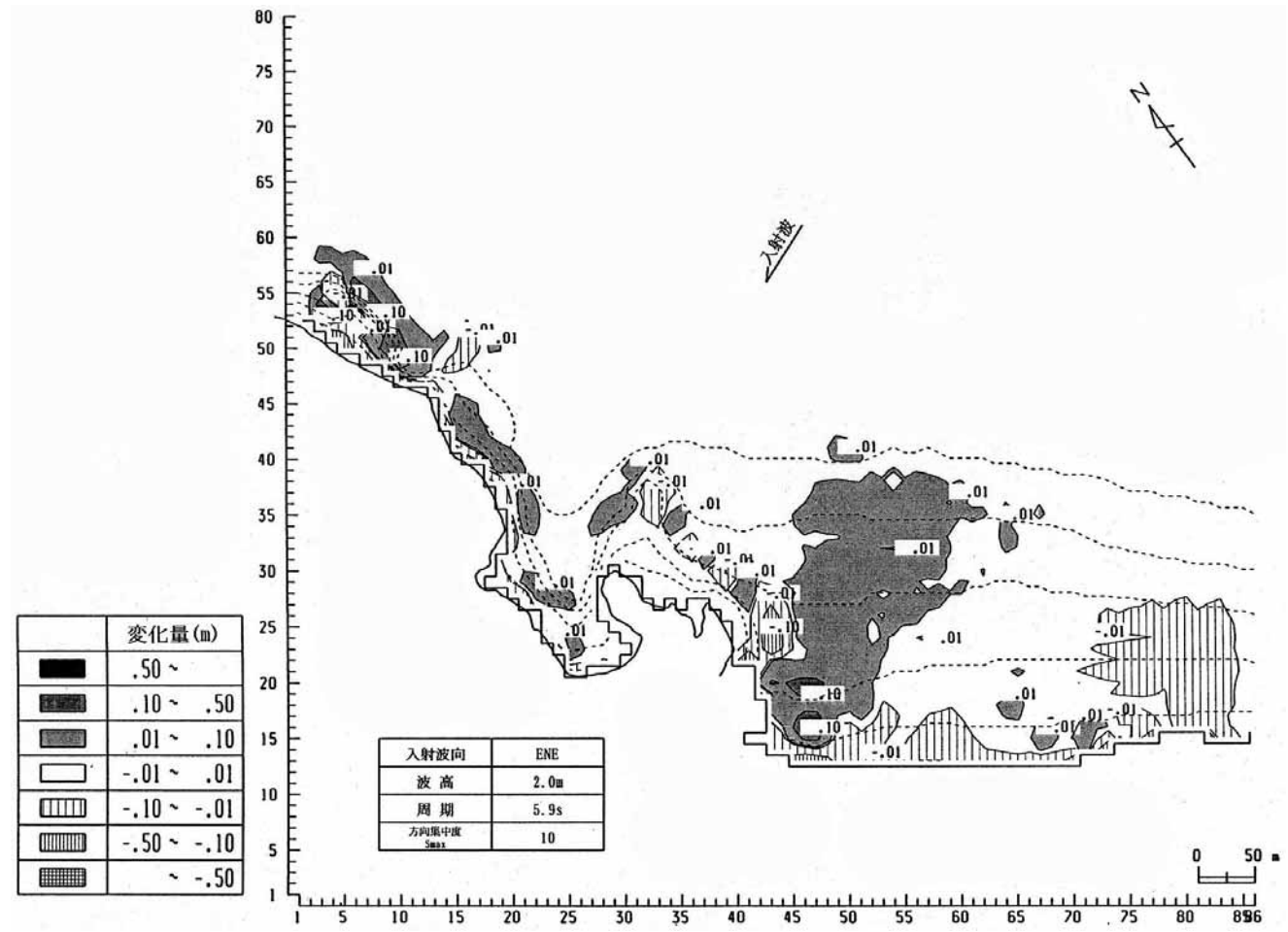


図 8.1.2-4(2) 地形変化予測計算結果 (現況地形、波向: ENE)

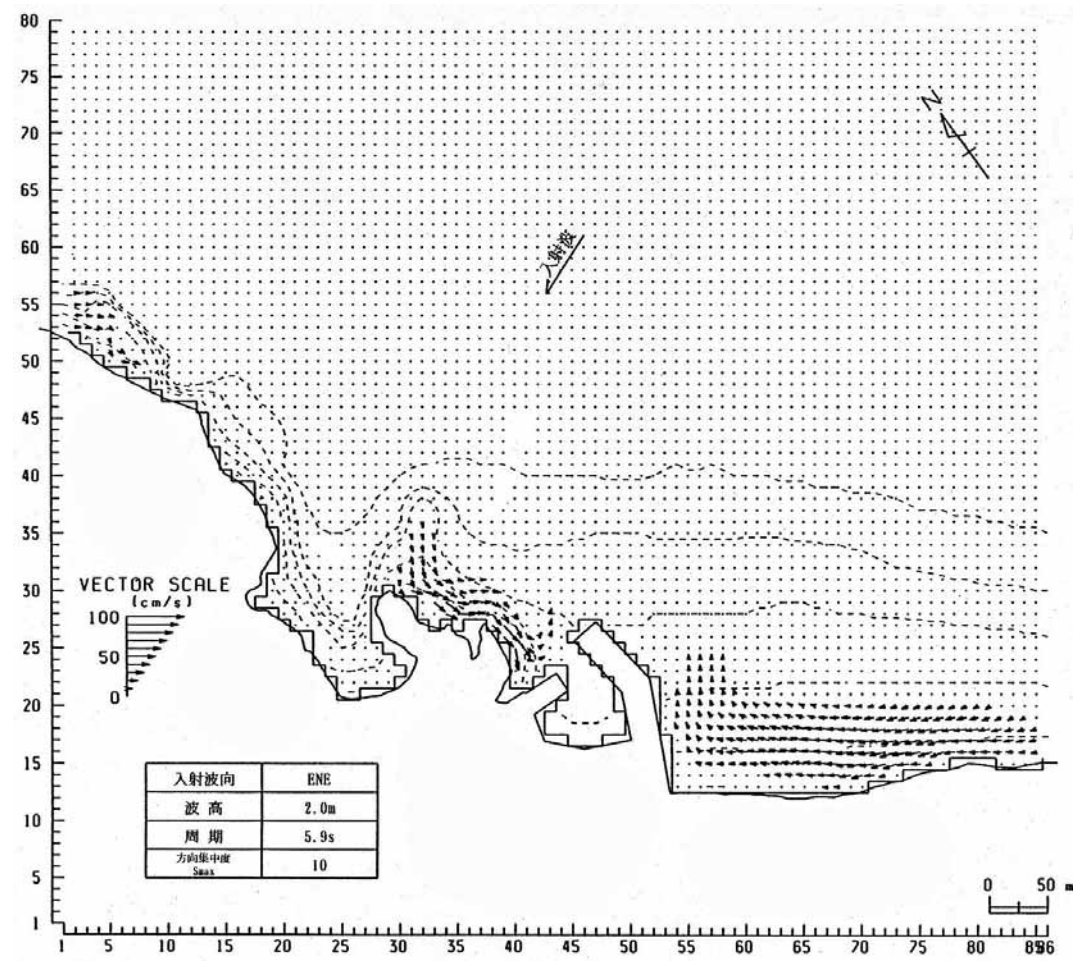


図 8.1.2-4(1) 海浜流の計算結果 (漁港建設後、波向: ENE)

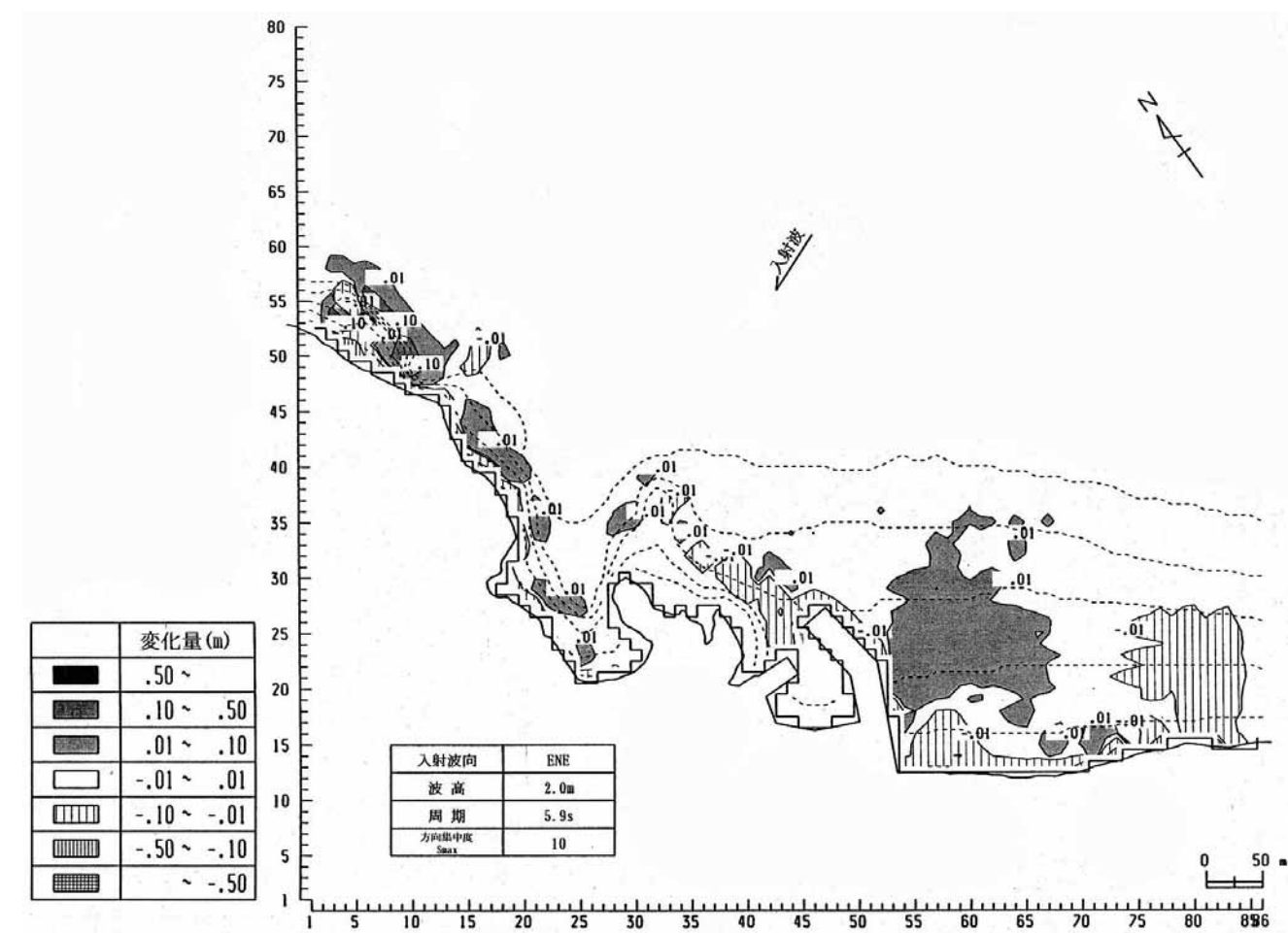


図 8.1.2-4(2) 地形変化予測計算結果 (漁港建設後、波向: ENE)